

国境(境界)線上に教会を

松浦 悟郎

いろいろな機会に国境について考えさせられました。湾岸戦争の時、タイ、カンボジア訪問の時——。戦争や内戦、紛争が起これば、必ずと言っていいほど難民が出ます。弱い立場に置かれている彼らは戦火を逃れ、生き延びる為に国境へ国境へと向かっていきます。

なぜ国境なのでしょう。

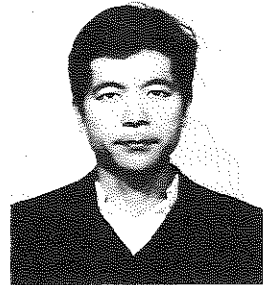
戦火を逃れ国境を越えた時、それは時には自分を守る壁になります。相手国に入ってしまった人を、もはや誰も追うことは出来ないからです。国際社会ではいかなる国も相手国を犯してはならないという原則は確かに生きています。しかし一方ではその同じ意味で国境を越えた難民もまた排除されるのです。すなわち自国で命の危機から逃れ国境を越えた瞬間、今度は他国侵犯として他国からの命の危機に遭遇するというジレンマに陥るのです。

それでも難民は生き延びるために国境へと向かいます。その場所しかないからです。

国境までたどりついた人々は双方の国の動きを見ながら、より危険度の少ない側を絶えず選びながら行ったり来たりするのです。彼らは限り無く国境線上に立とうとします。国境に幅があったらどれだけ救われるのでしょうか。つまり誰の土地でもない真に弱い立場に置かれている人々の避難所、安全地帯となれる領域です。神から無条件に与えられた土地で安全に人間らしい尊厳を保ちながら生きる権利は全ての人に与えられているからです。

ません。

カトリック教会で毎年出される国際協力の日メッセージの中に、特に排斥されやすい違法状態にある移住者の問題に触れた次のような一文があります。



「教会の中では誰も外国人ではありません。また、だれにとってもどこにおいても、教会は外国ではないのです。教会は、一致の秘跡、すなわち人類を結び合わせる力として、違法状態にある移住者が兄弟姉妹として認められ、受け入れられる場なのです。」

この「場」こそ教会の本来の姿であり、同時に世界の在り方でもあるのでしょうか。

「違法であればその人に何が起これども当然」という風潮が強い日本社会にあって、このことは重要な意味を持つと思います。メッセージは最後に次のように断言しています。

「その人を受け入れ、連帯することは、キリスト者がキリスト者として忠実であることであり、キリスト者にとっての義務なのです。」

教会はいろいろな意味での現代の国境線上に位置し、そこで「幅」を生み出し、あらゆる隔たりを越えて新しい関わりや連帯を築いていく役割を担っているのではないのでしょうか。そして、その国境「線」が次第に弱い立場に置かれている人達を無条件に受け入れる「幅」を持ち始め、大きく成長し、いつしか世界を覆ってしまえばどんなに良いかと思います。

教会は本来、国境線上にある無国籍の場かもしれ

(まつうら・ごろう 堺カトリック教会神父)

時のしるし

昨年末、聖公会とも関係の深い故星

野道夫氏を描いた映画「地球交響曲第3番」を見て、久しぶりに感動した。星野道夫氏は、一昨年の夏カムチャツカ半島の湖畔で野営中、熊に襲われて亡くなった写真家だ。彼が残した動物写真やエッセーには、感動を呼ぶものが数多くある。

この映画の中で、星野氏は「目に見えないものに価値を置く社会の思想に僕はたまらなく惹かれる」と語っている。この言葉は、ありふれた表現かもしれないが、彼が語るとき、ある特別な説得力をもって迫ってくる。アラスカという大自然と、そこに存在する真に豊かな人間社会に深く入り込んだ末、彼が感じ取った事実だからだ。彼は、直感として、見えないものの中に真実を見つけていたのだろう。

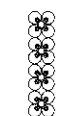
私たちの社会は、とにかく目に見えるものばかりを追いかけてきた。その結果が、昨今の殺伐とした事件であり、金融不安である。最も日常的なこととしては、企業や学校に見られる競争社会もその結果といえるだろう。教育の現場では、効率だけが追い求められ、小学生までが塾に通い、点数という目に見える形を追求める。その分、人々の喜びや悲しみといった微妙な情感を感じとることのできない、そして自然のなかのちょっとした変化や息吹を感じ取るることのできない子どもたちが大量生産されている。

見えるものを追求めるという意味では、教会もその例外ではない。信徒数、献金額、建物の有無や大小ばかりが事とされている。キリスト者は、信仰という見えない真実を生きたる拠りどころとしているにもかかわらず、その追求めるものは可視的なものになりがちなのである。

さて、見えないものの中に真実があるとすれば、同じく見えないものの中にそれとは正反対の悪があることも事実のようである。その典型的な例が、差別である。ある大学祭で「見えないようで、あるもの」というアート作品を見た。遠くから見ると、ただの画用紙一枚である。近づいてよく見ると、凸凹がある。さわってみると、その凸凹がさらにはっきりする。差別というものの本質をうまく表現した作品で、たいへん印象に残った。この大学の在日朝鮮人教育研究会の展示コーナーの作品だ。アートによってさまざまな問題提起をしようという趣旨の

見えないものを見抜く力

松山 献



展示だった。研修会という形に対して行き詰まりを感じていた私にとっては、アートによる訴求という方法は新鮮であった。

近年、いわゆる差別語というものがある、私たちはそれらを禁句として扱い、使わないようにする。差別語を使わないことと差別していないことは別の問題だが、そこが混同されがちだ。むしろ、差別語を使わない分、差別は潜在化しているともいえる。差別は見えない形で潜行しているのだ。だから、何年前のチマチョゴリ切り裂き事件のように、何か引き金になることが起きたとき、火山の爆発のように容易に噴火するのである。たとえば適切でないが、日本の社会において、差別は死火山ではなく休火山なのである。

さて、こうして考えてみると、見えないものが色々ある中で、真実なるものも悪なるものもしっかりと見抜くことが重要だということがわかる。

冒頭述べた映画のもう一人の主人公に、ハワイのナイノア・トンプソンという航海士がいる。彼は、近代的な航海器具を一切用いずに、かつてタヒチからハワイに人々が移住してきたときと同じように、星だけを頼りに航海を試みた。星の位置と、ちょっとした波の動き、風の向きだけで、方向を見失うことなく、ちゃんとハワイにたどりつけるのである。映画の中で、彼は、見えないものが見えるという信念をもてば、必ずその先に鳥が見えてくると語る。これは、超能力というような次元のものではなく、目に見えるもの、あるいはそれも含めた人間の五感によって感得可能なものによって、その先（奥）に存在する見えないものを感じ取る力である。見えないものを見抜く力なのである。この力こそが、私たちに今もっとも求められているものであり、共生社会を築いていくために不可欠な要素だと思う。

混迷を極める中で迎えた新しい年、「知る力と見抜く力を身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように……」（フィリピの信徒への手紙第1章9～10節）というパウロの祈りをかみしめたい。

（まつやま・けん 京都聖ステパノ教会信徒 大阪教区在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会協力委員）

大切なこと

西川 孝

早いもので東成工房に来て今年で4年になります。この間「人」や「社会」に対する考え方がかなり変わってきました。日々、精神障害者と呼ばれる人達と接する中で、自分がそれまであたりまえに生きてきた社会がいかに歪んでいるか、どれほど偏見に満ちているか、ということを知られました。

社会を構成する人たちの誰もが持つ心の問題、その心の問題に入院や通院で治療しなければならない程追い込まれた人達を排除しようとする社会。そのこと自体が自らの首をしめることであるのに、それに大多数の人が気づいていない。社会は彼らから学んで初めて健全な方向へ向かえると思います。今、精神障害者自身が語り始めています。彼らが語りやすい環境を整えるのが私たちの役割だと思っています。

東成工房のメンバーには以前工場主だった人、セールスマンだった人、スーパーの店員だった人、家庭の主婦だった人、大学生だった人、多くの職業を点々とした人、いろんな人がいます。みんな元の自分の生活レベルに戻りたいという焦りと常に闘っています。そんな焦りが時には他人に対して配慮のない言葉になったり、周囲との関係の障害となったり、また時には再入院という形になったりします。東成工房が目指すところは「そのままで、今のままでいい」というメッセージを伝え続けることです。「それでは何の発展もない」という方もおられますが、人は受け入れられていることを感じて、初めて前を向いて歩んでいけるんじゃないでしょうか。

少し私自身のことを書いてもいいでしょうか。私の妻は在日韓国人3世で3歳になる娘がいます。日曜日には3人で富田林市にある教会の礼拝に行っています。結婚の時、先方の両親の大変な反対に会い、日本人のしてきた罪の深さを思い知らされました。その後は仲良くしてもらっていますが、文字通り「共生」の難しさを家庭でも職場でも感じ、何度も主の御前に自分自身を投げ出したことがありました。だけどそのことを通して抑圧される側の悲しみや憤り

を少しでもくみ取ろうとするようになったかと思います。マザー・テレサは「真の不幸とは飢餓や貧困ではなく、自分が誰からも顧みられていないと思う事である」といいました。精神障害という病気は人間関係の病（自分自身との関係も含めて）といわれるようにひとりぼっちになりがちです。まだまだ生野、東成地域でも本当にたくさんの人達が入院や閉じこもり、また生き辛さを覚えながら生活されています。今、作業所と診療所、保健所そして聖公会生野センターがそのことについて話し始めていますが、多くの方の参加が待たれます。

精神障害者と呼ばれる人達と接していると、自分の生き方の変な所が見えてきます。ふだん疑問に感じながら通り過ぎていた問題の答えを見つけることができます。そして精神障害という病が何も特別なものではなく自分自身が抱えている心の問題と何ら変わるところがないことに気づきます。学ぶことはたくさんあり、そしてそれらは大切な事ばかりです。一度作業所を訪ねてください。

（にしかわ・たかし

精神障害者小規模作業所 東成工房職員）



（カット：久保麗子）

韓国地域活動研修 苦労日記

鈴木 恵一

9月から11月の2ヶ月間。生野センターから韓国へ研修に行かせていただきました。研修先は、ソウル市内の大韓聖公会の教会「奉天洞（ほんちやんど）分かち合いの家」とソウル市の東にある「南楊州（なみやんじゆ）教会」。どちらも、生野センターとの交流があって関係が深いところです。「ま、堅く考えないで韓国の空気・雰囲気に触れてくるくらいの気持ちで行っといで、何をするのかは、ついてから相談して。でも韓国語はちゃんと勉強するんだよ」と言われていたのですが、韓国語の勉強も十分にできないまま、これから何が起るのかよく分からないまま出発してしまいました。

出発の日がやってきてしまいました。一人で外国に行く事は始めてでしたし、何の準備が必要なのかも本当は全然分かっていなかったのです。出発の9月18日がやってきても、そのときわかっていたのは、金浦空港に誰かが迎えに来てくれる。ということだけ。「会えなかったら、地下鉄で一人で駅まで行ったらいいよ」とも言われて、ますます不安はつのるばかり。不安な気持ちで金浦空港につくと、あちこちにハングルがいっぱい。（当たり前なのですが）もっとしっかり勉強すればよかったと思いながら空港の中をうろうろ。やっとの思いで空港ロビーに出る事ができました。

空港の外に出ると、夏に生野センターに研修で来ていた分かち合いの家のスタッフが待っていてくれました。そのまま車で、研修先である奉天洞の分かち合いの家へ。じっくり景色を見る間もなく、あっという間に奉天洞に着いてみると、びっくり！そこは、地震のあとの神戸の街がずっと丘に広がっているようなところでした。にぎやかな市場をすぎると、家が壊れていて、いくつもパワーストーンやダンブが動いていて、砂煙が上がっていて……。なんだかすごいところに来てしまったと思いながら、初日の夜は暮れました。

分かち合いの家の活動は10年ほど前から数人の神父さんから始まった活動で、貧しい生活をしている

人々と生活を分かち合おうという活動です。子どもたちの勉強部屋になったり、おかあさんたちの読み書きの教室になったり、日曜日は教会になったり、また仕事を紹介したり、診療所になったりと、さまざまな活動をしています。近所の様々な人々が集まるにぎやかなところです。

分かち合いの家の近所には日雇いの仕事で生活している人が多く、一人一人ではなかなか安心してできる仕事を見つけるのが難しいことが多かったそうです。そこで、ここでは自活支援センターという事業を興して、清掃作業や、建物のリフォームをする会社。また服の縫製工場などをつくり、安定した仕事を作り出す事をしていました。そういう仕事場に行かせてもらって、1日いっしょに仕事をしてるのがここでの主な研修でした。安心してできる仕事といっても、それは決して楽な仕事というわけではありません。中でも、トンネルの清掃は夜中の仕事になり、水も使う作業は風邪を引きそうになるほど、大変な仕事です。それでも、こう安定して仕事があるという事は安心なことなのだそうです。

ようやく1人でバスや地下鉄に乗れるようになったところ、もう一つの研修先、南楊州教会へ行きました。ここは、今、家具工場団地の中にある教会で、外国人労働者が多く生活している地域です。この教会で、外国人労働者問題についての研修をしました。

2ヶ月間のほとんど言葉の通じない生活は、思いのほか重い体験でした。「韓国の空気を吸ってくる」とか「異文化体験」等と表現するとなんだかほんわかした雰囲気が漂いますが、でも、知らない文化に触れるという事は、戸惑いがあったり不安があったり、ほんわかではない大きな心の動きがありました。でも、知らなかった事を知るようになることは、同時に喜びもあります。本当に多くの人に助けられている事を感じた2ヶ月間でもありました。韓国語の勉強を続けて、今回の研修のお返しをしたいと思います。

（すずき・けいいち

聖公会生野センター アルバイトスタッフ）

「ナヌムの家Ⅱ」「南京1937」、アジアの女が生きるこの姿

松井 寛子

ビョン・ヨンジュ監督の「ナヌムの家Ⅱ」が完成。大阪は4月に公開される。公開に先立ち「出演者」であるハルモニが監督と共に「キャンペーン」で来日することになったが、これにカン・ドッキョンさんは来ない。昨年2月に彼女はガンで亡くなられた。「ナヌムの家Ⅱ」は彼女の闘病生活から始まる。ハルモニたちは、ソウル郊外の新築の家に移り、ハルモニたちの日々の暮らしをビョン監督はていねいに描いている。画面からはハルモニたちの「生きることの深さ」がジーンと心に染み入るように伝わってくる。



ナヌムの家Ⅱ

ハルモニたちは畑を耕し、キムチを漬け、秋にはカボチャを頭に載せる。ハルモニは「人にどう見られたい？」というビョン監督に「牛のように働く人…人に迷惑をかけず、自分で生きてきた。そのように思われたい」と答える。

1996年「ナヌムの家Ⅰ」の公開の際は、若い人たちが観てくれるだろう。こういう作品は、「従軍慰安婦問題」に関心がない人たちにこそ多く観てもらいたい、とすごく苦心した。結果、韓国の若い女性が監督した映画と言うこともあり若い人たちがたくさん観てくれた。ハルモニたちの自らをさらけ出す半生の語り、ハルモニたちを撮るビョン監督の謙虚な姿勢は、画面から滲み出ている、女性としての悲しみの共有と深い感銘を観た人たちに与えた。だからして「Ⅱ」の完成は「Ⅰ」を観た人たちでは待ち望まれていた。

「名乗り出て良かったよ」「生まれ変わったら」の

夢を話すハルモニたち。重たいテーマの映画なのになぜかすがすがしい風を私に感じさせてくれる。「ありがとうハルモニ。ありがとうビョンちゃん、映画を観せてくれて」と思わずにいられない。

私が尊敬する年長の友人はいつも「歴史を知っとかんとあかん。近代史を」と言う。この近代史が、おおげさに言えば戦後の学校教育、受験教育では、教えられない。それは「時間がない」と言う理由でおろそかにされてきたのだ。私も含め、多くの人が「従軍慰安婦」のことはもちろん、南京大虐殺もあり知らない。そういうことが1937年にあったことも。私自身恥をさらすことになるが、この南京でのことで日本軍は「慰安婦」が軍隊に必要な不可欠のものであると言うことになったというのを、昨年の12月「南京1937」（中国映画）の上映を共にした人からはじめて聞いて驚いた。実行委員長の芦田千恵さん



南京 1937

（84歳）は体験を踏まえての挨拶の最後に「戦争は『害』ばかりで『益』になるのは何一つありません。」といわれた。そのとおりだと思

った。学校教育でおろそかにされてきた「近代史」をいろんな形で学ぶことは未来を生きようとする様々な人たちの中に改めて大切なことだと思わずにいられない。

「ナヌムの家」「南京1937」、この2本の映画はやはり豊かな未来へとつながる作品だと思う。

（まつい・ひろこ シネ・ヌーヴォ支配人）

「南京1937」は3月7日より、「ナヌムの家Ⅱ」は4月中旬よりともにシネヌーヴォ（地下鉄九条駅下車）（TEL06-582-1416）で公開されます。聖公会生野センターでも前売りチケットを取り扱っています。

韓国旅行記

今西 豊行

みなさま3ヶ月振りの“お元気ですか”ですね。つい先日、こちらソウルではひと晩のうちに雪が10cm程積もり、最低気温がマイナス15度。冷蔵庫の中を歩いているようでした。元来、私は寒い所も暑い所も大キライ人間なので、毎日がゆううつでたまりません。早く来ないかな気持ちのいい春……

さてウレムの読者のみなさんの中には、旅行するのがキライという方は少ないと思いますので、今日は韓国旅行記を書いていこうと思います。こちらでは高速バスという交通機関が驚くほど発達しています。たとえばソウル～釜山は10分に1本。ひなびた温泉街へも20分に1本はある。また、値段もすごく安い。ソウル～釜山では、飛行機31,500ウォン（1時間）、鉄道セマウル号29,000ウォン（4時間）、高速バス20,000ウォン（5時間20分）という訳です。

余談ですが、韓国的高速道路はよく混みます。だから土曜日お昼12時から、日曜・祝日の朝9時から高速道路の一車線が高速バス専用レーンとなります。ソウル市内を走る市内バスも朝6時から夜9時まで基本的には一番右側のバス専用レーンを走ります。

【温泉地レポート】

お風呂好きの我々にとってシャワーが続くと湯船が恋しくなりますよね。ということで久々に湯船にドカーッと浸かりたく、先ほども少し書いたひなびた温泉地、韓国で最も長い歴史を持つ忠清南道、温陽（オニャン）へ行きました。乗客はたったの5人“ほんまにこれで採算取れるんかいな？”と思いつつ初めての国内旅行に思いをはせ、予定通りの1時間15分で到着。韓国ではどの都市に行ってもバスターミナルと駅が離れており、もちろん温陽も同様なので、バスターミナルより市バス400ウォンに乗り、駅前の旅館街へ行きました。旅館数軒、部屋を見せてもらい、アジュンマの愛想はあまり良くはなかったが部屋がきれいで湯船が一番大きかった所25,000ウォンに泊りました。荷物を置くなりさっそくお風呂に入る。3ヶ月振りの“お湯に浸かる”という行動に感動する。街の市場はソウルより物価は安く、

外国人観光客慣れしていない所が良かった。また、駅前にある観光案内所は、なぜか保健所も兼ねており子どもが予防注射をうたれて泣いていた。夜になると人通りもありなく、かなりさびしい所だった。結局、娯楽もないため4回お風呂に入っていました。

【国立公園レポート】

ソウルには海がない。という訳で高速バスで東へ4時間30分のところにある江原道の東草（ソクチョ）へ行きました。ここは海水浴でも有名ですが、韓国で一番有名といわれる、雪岳山（ソラクサン）国立公園の玄関口としても有名です。最初、海を見たとき“あ日本海や！”と言ってしまいました。もちろん韓国では“東海（トンヘ）”なのですが、いくら韓国が好きでも、ここまでの心はないのに気付きました。

普段私は登山なんて全くしないのですが、“せっかく来たのだから記念に。”なんて軽い気持ちで700mぐらいの山を登ったのですが、途中から急坂で下を見ると思わず目をつぶりたくなる程（実際つぶりましたけど）恐ろしく、登ってきたことを後悔してたのに登山好きの韓国人は、笑顔を浮かべ、あるアジヨシはサンダルをはき、肩には何と酒びんを担ぎながら登っているではありませんか。あとは、もう惰性で登った以外には言えません。いつかまた、旅行の機会があれば田舎に行ってみたいと思っています。

（いまにし・とよゆき 現在ソウル留学中）

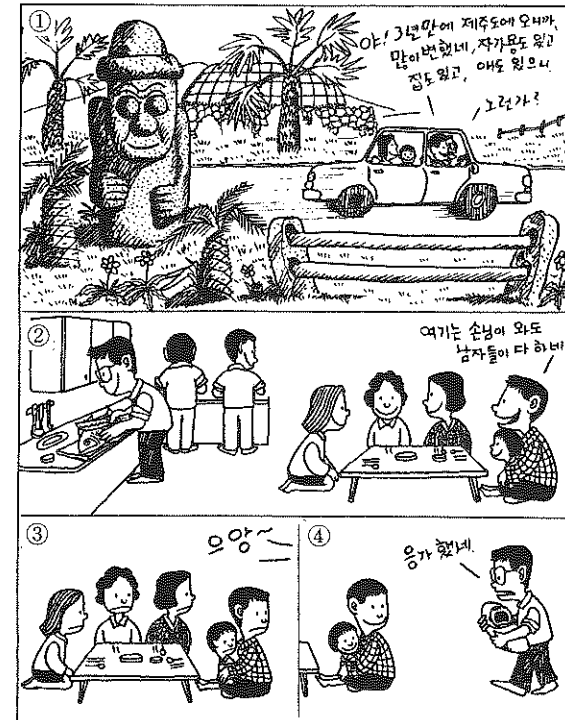


雪岳山（ソラクサン）にて

連載マンガ⑥

제주도 남자들

済州島の男たち



- ①やあ、済州島に久しぶりに来たらずいぶん変わったねえ。自家用車もあり、家もあり、子どももあるんだから。そうだろう？
- ②ここはお客さんが来ても男たちがみんなするんだね。
- ③うわーん
- ④「うわーん」と言ってるよ
- ⑤うちの旦那だけがよくするんだろと思ってたのに、済州島の男たちはもっとよくするね。済州島は伝統的に女たちが仕事が多いから男たちが家事をするのは自然なことのようなね。
- ⑦そうね、よくするのはなんでもよくするのよ。

作者：崔正鉉（ちえ・じょんひょん）
パンチョギ（もう一方）の愛称で親しまれる。1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。そのユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995年第1回平等夫婦賞受賞。

- ⑧それでも、不満は多いんだから。
- ⑨慶尚道に行ってみなさいよ。慶尚道の男に後かたずけちよとしてよと言ったら「俺は女か？」だもんね。
- ⑩そうそう、済州島の女たちはそんな家に一度行ってみたいとね。
- ⑪だけど、するときにはしても酒を飲んで遅く帰ってくるし、朝は遅く起きるのよ。
- ⑫だけど、娘がいる家では済州島の婿をもらいたいというでしょう。僕たちのハエリンの婿候補はどっかにいませんかえ。
- ⑬僕たちの子どもがいるじゃないの。
- ⑭そちらの子は今6ヶ月でうちの子は5歳ですよ。年下でもいいじゃないの。



はじめて食べたキムチの味は

松原恵美子

生野区にあるプール学院では、今までにも社会科の時間に御幸通商店街まで行ったり、有志でフィールドワークを行ってきた。昨年11月に、中学2年生全員でフィールドワークを行ったのは、初めてで、163人一斉に行うのであれば、オリエンテーリング形式しかないかなあということで、24のグループに分かれて地図を持って歩くことにした。

11月26日、天候は悪く出発前には、「大雨になるで」「警報でるんちゃう」などのあたたかい言葉にも負けず、元気に学校を出発したもの、生野郵便局に着くころには足下はびしょぬれ状態。

このフィールドワークの目的は、御幸通商店街に行くまでの街の様子を観ながら商店街で買い物をすることであったが、もう1つ、学校の近所に障害者のための作業所があることを知ることを入れたのだが、雨のため道に迷って作業所に寄れなかったグループがたくさんあったのは残念だった。

また、オリエンテーリング形式なので問題のシートをもってまわっていたが、問題を解くどころではなく、街の様子（たとえば、どんな工場があるか）をみる余裕もなかった。

が、各グループなんとか無事に目的の御幸通商店街に着くことができた。ここでは雨が幸いしてか、他のお客さんが少ない。課題にグループ毎に千円以内で調理済みの食べ物を買って帰るというがあるので、商店街を右に左にと大忙しで何を買おうかと相談している。中には「お母さんにたのまれてん」と、むし豚やお肉を買う子もいれば、「おみやげにラーメン買っていい」と課題以外の買い物をしている子もいっぱいいる。「どこの中学生や」「何年生」「これ、食べていき」とあっちこちの店先で試食をさせてもらっている。課題に買い物をした商品についての説明を聞いてくるというのがあるわけだが、さすがが中学生、コミュニケーションはばっちりのようだ。試食でおなかもいっぱいになって（おもち3個に、するめを食べたという子もいた）課題の買い物が終わったら次に気になるのは、民族衣装の

店先。特に「クムガン」（婚礼衣装を扱っている店）の前には人だかりができています。

そして慌ただしく学校に戻り各教室で試食タイム。教室はもちろんのこと廊下までキムチのにおいがする。「キムチ食べるのはじめて」という声もたくさんあり、すこしどきどきしながら手でつまんで食べてみる。「おいしい」という声があちこちからおこり、それぞれ「チヂミもおいしい」「おもちもおいしい」と交換しながら食べている。「これどこで買ったん」「これ何入っているの」という私の質問にも答え、私もあっちこちのキムチをつまみながら、なごやかに試食タイムは終わった。

雨の中のフィールドワークだったため（しかも半端じゃない雨の中）目的はあまり果たせなかったかもしれない。しかし、びしょびしょのソックスを教室で干しながら（女子校ならではの光景かも）「キムチおいしいね」と嬉しそうな顔をみていると、つついこれでもよかったかなと思えてくる。食べ物の力は偉大である。

プール学院は地域との関わりが薄くチェックポイントを考えたものの、お願いに行き受けてもらえるのか不安はあったが、生野郵便局（窓口にハングルの表記がある）、わだち作業所（ここはアルミ缶を持っていくなどのつながりがあるのでお願いしやすかった）、こさり（パンを焼いている作業所）とも気持ちよく引き受けてくださった。

実はフィールドワークは、年間の同和ホームルームを計画した時点では考えてはなく、学年の中で何となく「実際に街、歩いたらええやん」という声があがって急きょ計画したのである。後から考えると、もっとこうしたらいいかなということもあったが、一番感じたことは地域とのつながりである。今後もつづけていけたらと思う。また今回行った中2の人たちも機会があれば自分たちで自主的に行ってみてほしい。

（まつばら・えみこ プール学院中学校
・高等学校宗教科教諭 同和教育推進委員）

大阪考④

高二三

裸の捕虜
鄭承博著作集第1巻

（鄭承博著 1993年、新幹社刊）
定価：本体価格 3000 円



私のオモヒは済州島から大阪へ行き、そして各地をわたり歩き、いま東京にいる。大阪暮らしの人々にはあまり自覚されていないのだろうが、在日朝鮮人にとっては基地（ベース）になる地域がいくつかあって、大阪はまちがいなくその代表的な地域である。

現在淡路島に在住する作家・鄭承博（ちょん・すんばく）は和歌山県を韓国慶尚北道につぐ第二の故郷といっているが、淡路島に定住するまでの過渡期をやはり大阪ですごしている。第二次世界大戦の時代である。鄭承博は淡路島現代史の生き字引といわれる人であるが大阪大空襲を実体験し、それを作品化している数少ない作家でもある。私自身は『裸の捕虜』を編集していて、鄭承博と大阪大空襲という観点を持ち合わせていなかった。作家で演劇人でもある和田徹から、戦後50年を記念した公演で『裸の捕虜』の一部を朗読させて欲しいという申し入れを受けて、その理由が大阪大空襲にまつわる箇所であって初めて気づかされた次第である。

『裸の捕虜』の表題作では、大阪とのかかわりといえば、主人公が金属会社の食糧調達人として、和歌山県に買い出しに行く姿が描かれるし、「地点」では脱走のち新聞配達人として大阪西浜界限での暮らしが描かれている。また「電灯が点いている」では猪飼野での工場労働を経て、淡路島へ渡るプロセスが描かれる。大阪大空襲が描かれるのは、「地点」の中においてである。

私はこの作品を読むまで、大阪大空襲の前段階でアメリカ軍が「三月十三日の午後十一時よりB29三

百機が、大阪の空襲を行います」などという予告ビラを撒いていたなんて知らなかった。このビラを見て、雇い主の新聞店の店主夫婦は主人公に配達をまかせて疎開してしまうし、薬屋の娘・秋ちゃんも同様に疎開する。日本人といつわって就職した朝鮮人である主人公だけが店に残るハメになる。なんとも皮肉な話ではないか。

大空襲の前、残された秋ちゃんの飼っていた犬の鎖をはずしてやり助けるのだが、空襲ののち帰って来た犬がしきりに体を擦りつけてくる。だが秋ちゃんの姿は見えない。この暗喩するものをどう受けとめるべきなのだろう。

「この広い焼け野原に、これからは火の雨が降るはずもない」という発想に、大阪人のド根性を鄭承博は身につけたにちがいない。

大阪大空襲の悲惨な状況を描きながらも、作品は決して絶望的ではない。そこには必ず庶民の暮らしがあり、心の交流がある。そしてそれを決して誇張せず、淡々と描くのだが、その中に勁さを感じさせるのが鄭承博の作品である。また人柄そのものでもある。いまや鄭承博は大阪人ではなく、いかにも淡路人である。これは淡路島の風土と歴史がなした業であろうか、鄭承博固有のものであるのかわからない。淡路人は大阪人の気質を内包しているように感じるのだ。豊かな田舎の生み出した精神風土なのだろう。

1992年から刊行してきた、鄭承博著作集がこのたび（97年12月）に発行された『奪われた言葉』をもって全六巻完結した。94年12月に第5回目の配本を行って実に3年の歳月を費やしてしまった。神戸・淡路大地震がなければ、95年8月には完結していたはずであった。

（こ・いーさむ 新幹社代表）

「裸の捕虜」鄭承博著作集第1巻は
聖公会生野センターでも取り扱っています

1997 年を振り返る

【1月】

- 7 現代キリスト教セミナー（比叡山）
- 14 保母学習会（奇数月に実施）
- 24 旭高校人権講演会 こみち寄席（奇数月第3金曜日）
- 29 生野地域活動サポートセンター例会
- 31 センター運営委員会

【2月】

- 8 ソウル神学大学社会福祉学科研修
- 15 精神障害者夜の集い（毎月1回）

【3月】

- 1 SCM(学生キリスト教運動)生野、釜ヶ崎現場研修(～12)
- 8～9 3・1 日韓の歴史を学ぶ集会 「日韓キリスト教史と祈り」

- 10 NCC(日本キリスト教協議会)総会シンポジウム
- 17 精神障害者小規模作業所「トータスハウス」運営委員会
- 23 奈良キリスト教会訪問
- 24 旭高校国際教養科韓国研修旅行(～27)

【4月】

- 6 第9回日韓教会青年協議会
- 8 韓国語教室開講(毎週火曜日)
- 9 絵画教室開講(毎週水・木曜日)
- 13 聖ガブリエル教会再建5周年礼拝センター開設5周年記念座談会
- 14 黒田ジャーナル10周年記念会

【5月】

- 3 在日大韓キリスト教会関西地方会青年会講演
- 13 保母学習会
- 19 聖公会長田センター部長会

【6月】

- 1 センター開設5周年記念公演
「風あれ、河あり、人の間に光りあれ！」
- 13 九州教区講演キャラバン(～15)
- 16 東京・ソウル21世紀宣教大会(～19)
- 20 センター後援会の集い

写真と日誌でつづる聖公



3月8・9日
3・1 日韓の歴史を学ぶ集会
「日韓キリスト教史と祈り」
講師：井田 泉



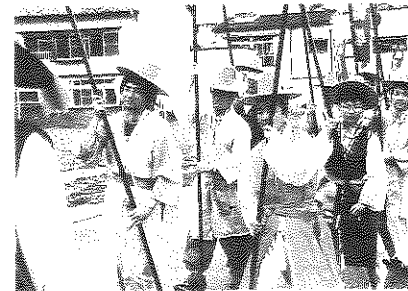
4月13日
センター開設
5周年座談会



風あれ、河あり、人の間に
光りあれ

会生野センターの1年

(1997年1月～12月)



対馬研修旅行



▲9・1 共に生
きるを考える集
会
講師：金徳煥



人権講座
記憶は弱者にあり
講師：マルセ太郎



ガブリエル感謝祭

【7月】

- 4 大阪教区宣教協議会実行委員会
- 21 枚方高校生野現場研修
- 24 韓国・平和医療団大阪研修
- 25 市民活動地域支援システム研究会合宿(～26)
- 28 クリスマン新聞「在日キリスト者座談会」

【8月】

- 1 元従軍慰安婦証言集会
- 2 在日韓国・朝鮮人宣教協議会対馬研修旅行(～4)
- 9 日韓聖公会青年キャンプ(～14)
- 18 大韓聖公会分かち合いの家関西研修(～23)
- 24, 31 9・1共に生きるを考える集会

【9月】

- 7 関東3教区日韓の歴史を学ぶ集い
- 11 大阪府自治体政策提言研究会
市民活動地域支援システム研究会委員会
- 21 日本キリスト教団大阪教区河北地区講演会
鈴木恵一韓国地域活動研修(～11月)

【10月】

- 9 大阪教区宣教協議会(～11)
- 20 喫茶「トータスハウス」オープン
- 25 大阪精神医療ケースワーカー学習会

【11月】

- 8 生野地域活動サポートセンター人権講座
「記憶は弱者にあり」

【12月】

- 16 ガブリエル感謝祭
- 【12月】
- 12 市民活動地域支援システム研究会総括会議
- 15 大阪市政研究座談会

確実に歩んでいるかな？

「地域の中で」

あっと言う間の1年でした。6月1日のセンター開設5周年記念公演「風あれ、河あり、人の間に光りあれ！」はマルセ太郎さん、永六輔さん、それに趙博(ちょう・ぱく)さん、金成亀(きむ・そんぐ)さんという豪華メンバーで行うことが出来ました。来場者も1000名を越え、多くの方の支援と協力で当初の予定よりも多くの金額を「被災障害者支援ゆめ・風10億円基金」と「トータスハウス」に献金することができました。その結果(もちろんそれはほんの一部だけ)トータスハウスでは10月20日に喫茶店をオープンすることができました。聖公会生野センターが設置母体の一つになり、運営委員として

加わっている立場から言うとこれほどうれしいことはありません。喫茶店は月～金曜日まで無理をせずに営業をしています。近くに來られれば一度のぞいてみて下さい。

又、ここ数年活動を続けてきた「精神障害者の生活の場作りを進める会」が評価されたのでしょうか(?)10月より大阪市の「精神障害者地域サロン事業」として認められ、若干ですが補助金を得ることができるようになりました。

今年から始めた「生野地域活動サポートセンター」はNPO(非営利団体)の働きとしておこなっています。4月19日には正式発足を迎えることになりました。これは生野地域で地域活動になっている人た

ちが異分野にまたがって交流し、「私たちの街作り」に参加しようとするものです。それぞれが持つ独自の働きを大切に、手を結んでいくそんな働きになっていくことを願っています。

「日韓の交流の中で」

昨年に続き今年も日韓の交流が盛んでした。日誌をみてもよく解るかと思います。ただ昨年の後半から韓国の経済危機が表面化し、私たちとつながりの深い人たちも困難な状況に置かれることを思うと心が痛みます。

またアルバイトスタッフの鈴木恵一さんが韓国に

2ヶ月研修に行きましたが、言葉と異文化の中で苦勞したようです。この苦勞がよい経験となり今後の働きに活かされていくことを願っています。

「多くの人と共に」

1年間を振り返ると確実に歩んでいるかな?と思ったりします。教会の中では聖公会大阪教区を中心として「在日のこと」「日韓の歴史のこと」に関してリソースの働きが少しはできているんじゃないかと密かに自負しています。これからも多くの人の祈りや支援と共に歩いていくそんなセンターになっていくことを願っています。(呉光現 記)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

○後援会費

年額 1口 3,000円 (個人)

1口 10,000円 (団体)

・郵便振込

00960-0-133429

「聖公会生野センター後援会」

□自由献金もよろしくをお願いします

・郵便振込

00910-1-321780

「聖公会生野センター」

・銀行振込

三和銀行 東大阪支店

普通預金 3711311

「聖公会生野センター」

余 韻

■私の所属する大阪都心の教会は、戦争末期、大空襲で焼け出された中国の人たちの避難場所になった。この人たちは、空襲の警報が鳴る前にどこかに姿を消し、終わるとまた帰ってきて、礼拝堂で煮炊きをしていた、と先輩からよく聞かされた。彼らは、どこからか空襲の情報を手に入れていたのだろう、という。だが、したたかに生きる逞しいこの人たちが、教会が被弾した時、懸命に消火を手伝ってくれた。アホな戦争やったが、こうした話もありました。もうすぐ大空襲から、まる53年。(大)

■年末年始にわたって不覚にも扁桃腺を腫らしてしまった。約2週間お粥とうどんだけの生活でした。お酒が解禁になった日はまたべろべろになるといういたらく。これじゃ98年も…。今回のマンガの済州島の男たちは済州島出身の2世としては「ほんまかいや」と感じています。陸地の人から見ると済州島の男はそう見えるのかな？それなら実体もそれに近づきたいものです。(光)

■映画「南京1937」を観た。さすがにどーんと重い。ただ、？もあった。“なんで日本人の妻なんやろ…”。まあそれはパンフレット読んで一応は納得したけれど。キャストのほとんどが中国人。(日本からの参加は、日本人の妻役の早乙女愛さんと松井大将の役をやった2人だけ)日本兵の役をどんな気持ちで演ったんでしょう…。昨年8月に長崎の原爆資料館で、うわさ(?)の南京大虐殺の展示をみたあまりのギャップに、これは南京に行って資料館ちゃんとみてこなあかんわとおもっている今日この頃。(恵)

■2ヶ月間、長いようであっという間の韓国研修でした。しかし、それは僕にとってのこと。結婚して半年で2ヶ月間離れるというのは想像以上のことでした。お互い一人暮らしに慣れてしまっ…(す)

■1月12日、生野センターが、地域で初めて出会った一人暮らしの韓国人Kさんが入院先の病院でなくなつた。初めて関わったときから身よりのないこの方のお葬式はガブリエル教会でと思っていたが、はたしてそうだった。最近ボランティアで接した8名ほどで、送る集いを行った。一人一人がKさんとの出会いを語り、説教に代えた。聞いていると、肉親こそ居なかったが、決して一人きりの人ではなかった。むしろ、地域の人に囲まれて居た部分もあった。それぞれが少しずつ時間を出し合う大切さを知らされた。(テモチ)

■長田センターの働きの中から、3年を経た現在も明日への展望を持てずに、なお苦しみつづけている人たちの姿が浮かび上がってきています。国籍や年齢や健康、そして経済力などの点で弱い人たちが「人」としていかされる社会をつくっていかねばならないという観点から、長田センターへの支援が強められるよう、心から願うとともに、自分自身の支援の仕方を再点検しています。(ハミー)

ちょっとひと息

辛普森

秋風の扇

時期が過ぎて必要なくなったものをたとえる言葉。

発行所：聖公会生野センター

〒544 大阪市生野区小路東1-17-28

TEL 06-754-4356 / FAX 06-754-4357

e-mail cyj02040@niftyserve.or.jp

発行人：木村 幸夫

編集人：大橋 襄